



聞き書き研究会は、江戸川区を愛し、江戸川区で強く逞しく生きた女性の姿を聞き書きとして残すため、江戸川区女性センターの区民ボランティアが2010年に始めた活動です。女性センターは2020年に人権・男女共同参画推進センターに統合され、この活動を所管しています。

「国民健康保険料の徴収員になって」

みなみ だ
南田 とき

1936年(昭和11年)
江戸川区上篠崎生まれ
上篠崎在住



江戸川土手が青春

あたしの若いころは青年団があったけど、あたしは気づまりで入りたくなかったの。17歳ごろに小岩支所(現、小岩事務所)の成人学校に近所の人と3人で行ったら男の大学生が多くてびっくりしました。あたしたちは農家の人だし、その人たちは小岩とか小松川の人。小岩は都会でね、銀行もあつたし映画館は3つもあつた。篠崎は無医村で店は数えるほど。洋服なんかは、小岩の万屋が盆や正月前に自転車に行李を積んでいっぱい持ってきてね。

成人学校は女の人が4人いて全部で10人ぐらい、「文好会」って名前をつけて俳句を作ったり、雑誌を出したりしました。会は2、3年でなくなつたけど、その後も付き合っていたのよ。小岩から江戸川土手伝いに遊びに来るとみんなが集まってね。父親は男の人たちがいたからあまりいい顔しない。だからそつと抜け出して行くのよ。あたしはほら、農家だったからモンペ姿でね。本の話などして土手を篠崎水門まで歩いたり、江戸川に留まっている木舟に乗ったりして遊びました。川向うの市川にも田んぼがある近所の農家の舟なんです。

船橋の谷津遊園に海水浴にも行きましたよ。水着なんか無いから、友だちの洋服をやってるお姉さんが「作ればいいよ」って、ノースリーブで下はブルマーみたくフワッとさせてね。みんな就職したり教員になつたりで、あたしも結婚話があつて自然と会わなくなりましたね。

国民学校初等科4年生の時に終戦

兄貴は早くに戦争に行ったんです。中国のほうみたいよ。お手紙や靴を送ってもらったのを覚えてます。次兄は主計局(現、財務省)に勤めて明治大学の夜間に通っていたけど、志願して市川の部隊に入ってそこで終戦。一番上の姉は24歳違つから結婚してました。父と母とまだ小学生の姉とあたしで庭に防空壕を作って必要なものだけ入れたんですよ。

昭和20年(1945年)1月には水門の近くのミヨシ化学が狙われ、小岩の学徒動員の子らも亡くなって、こつちの谷地(河川敷)にも爆弾が落ちた。親に止められたけど友だちと見に行きました。3月10日の空襲は忘れられない。爆弾が落ちる、どんどん落ちて、真っ赤に燃えるのを庭から見ていた。目に焼き付

いています。翌朝、父が小松川の叔母を探しに行ったら、「橋の下にバケツで水を被って4人の子どもといた。死んだ人がたくさん川に浮かんでいた」って。

その5日後に山形県最上(現、最上町)の瀬見温泉に学童疎開しました。押上分教場(現、篠崎第二小学校)3年生でした。宿が旅館でお風呂は温泉だったから良かったけど、食べ物はね、ご飯が茶碗に何粒しかないお粥。虱はほんとうに凄かった。それと病眼。みんな罹つたけどあたしだけは目が細いからならなかったの。だから同級生が夜中にトイレ行く時、目やにを洗ってやって連れてってあげたのよ。

終戦後すぐに父が迎えに来て、みんなを連れて帰ろうとしたけど許されなくて、結局あたしだけが先に帰つたのよ。帰ってきて何で疎開に行かせたのって父に聞いたら、「小松川があんなふうには焼けちゃったら、家族で一人でも残つた方がいいんじゃないか。お前は一番終いだから生かしてやりたい」って。母は髪を短くしてくれ、熱湯で櫛を洗いながら梳かしてずーっと虱取りをしてくれました。

4年生からは本校(篠崎国民学校、現、篠崎小学校)へ行きました。担任の先生が清瀬に入院していた時、あたしが先頭になって子ども5人だけで電車に乗って行ったな。マスクして面会。先生は「よく来たなあ」って喜んで。その顔を今でも思い出します。先生は6年生の時退院してきて、修学旅行も無いから1組で豊島園へ行こうかって計画してくれた。ウォーターシュートに乗って濡れてみんな大騒ぎ。それだって、行かれない人がいっぱいいたのよ。

農家の終いっ子

あたしは新制中学の初めての1年生なんです、校舎はそれまで高等科が使っていた空き教室でした。新しい中学校は3年生の時に現在の篠崎第三小学校の場所にできました。卒業後、本八幡の不二洋裁学院(現、不二女子高等学校)へ2年通いました。学校から帰ってくると兄貴たちと畑に行つて、あたしは一番下だから草むしりとかして。卒業してからは農家を手伝って、夜は北小岩の編み物学校に週3回通つて5年で専科を修めました。

16歳ごろにすぐ上の姉と二人で小遣い稼ぎに夜なべで正月用の輪飾り作りを始めたら、兄貴が「来年から家でも

5寸玉を作る」って、昔やっていた注連縄作りが始まってね。姉とあたしの仕事は5寸玉の芯拵え、それを終わらせてから輪飾りも作りましたよ。

農家をやっていたのは、兄貴と義姉さんとあかし。父と母がいたけど、父はずーっと村のために働いて農業委員や土地改良の役員などいろいろ引き受け、曲がったことの嫌いな人。家業は兄貴の切り盛りで、「今日は遠い畑だぞ」と言われるとリヤカーを引いて行って、土を耕したり、小松菜を束ねたり。インゲンの蔓を「よく伸びたね」って支柱に絡げてあげて、植えて良かったと思う。花が咲き実になって、「今年はいいいのができたね」という収穫の 때가やっぱし喜びです。今の篠崎駅あたりから鹿骨までは田んぼや畑ばかりの緑地が続き、鹿骨街道は笹がいっぱいでした。

野菜は練馬区の江古田市場へ持って行った。それじゃなかったら新宿ね。兄貴が朝4時起きで自転車でリヤカーを付けて行っていた。それで小松川の橋が上がれないから押してくれって言って、次兄が出勤前に橋まで一緒に行っていました。自動車好きの兄貴は昭和30年(1955年)ごろには三輪車のダットサンを買ったのよ。

農家には日曜も何もない。休みは雨の日だけでしょ。雨降ると「映画でも行ってもいいよ」ってなるんだけど、忙しい時期は雨でも遊んでられない。農家はこれが当たり前。仕事はいやだと思ったことはないけど、定休日のない農家には嫁ぎたくないと思ったね。

友だち3、4人で毎年2、3回山に行っていたんですよ。尾瀬に行きたいと思ってもちょうど田植え時で行かなくて悔しかった。「手間っ借り」と言って行徳から人を頼んでやるほど田植えは忙しいから。尾瀬には結婚後に同級生4人を誘って夜行日帰りで行ってね、水芭蕉がきれいだったみんなに喜ばれました。21歳の夏にはテント持って穂高岳にも行ったんですよ。雪があって、キャンプして朝食作ったのは忘れられない思い出です。



◆篠崎の山仲間と浅間山に登る南田さん(向かって右端)

シャッキリは父親ゆずり

結婚して東小岩の夫の実家に居ましたが、ミシン技術者の夫が五日市工場長になったので西立川に越しました。昭和38年(1963年)に長女を産んだ時、乳腺炎になって立川病院で切ったの。近所の人が「私が全部やってあげる」ってみてくれて。その人は今でも

付き合っていますけど、ほんとにあたしは善い人にばかり会うのよね。

兄貴が市場の帰りに野菜や母が用意した食品などを届けてくれて有り難かった。立川は市場から倍以上も先なんですよ。3年後にさらに遠くの秋川(現、あきる野市)に引っ越しましたが、そこまでも来てくれてね。そこで長男も生まれ、子育てしながら糸糸屋さんから頼まれた子ども服を1日1枚くらい編み上げてたわ。

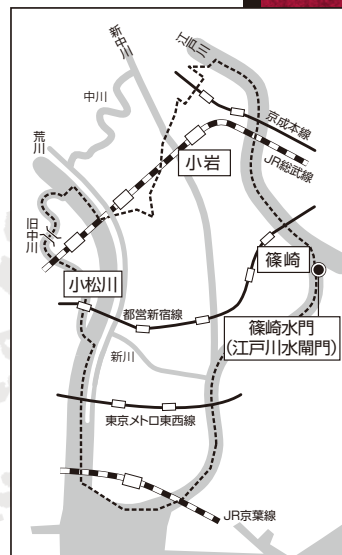
昭和47年(1972年)3月、上篠崎に家建てて帰って来て、夫は区内に多かった縫製業者のミシン修理の仕事を始め、あたしは編み物を教えていました。その年に町会長に紹介され36歳で国民健康保険料の徴収員の面接を受け合格。次兄に「誠実で親切で責任を持ってやらなくちゃだめだよ」って言われて始めました。江戸川区は前年に「国民健康保険料徴収嘱託員制度」を作って主婦を非常勤職員として40人近く採用したんです。それぞれの家の都合に合わせて集金に回るので、収納率は昭和48年(1973年)度には97%に大幅アップして、23区でトップだったんですよ。

あたしは多い時は1,000世帯近くを担当し、毎月集金に行く家がほとんどでした。留守だったり、今日はお金がないと断られる時もけっこうあって、何回でも夜でも行きましたよ。集金から帰ると徴収簿に記入し現金と合わせると2時間かかりますよ。そして翌朝一番で銀行に納めるのね。保険以外のこともよく聞かれて、その場で答えられない時は事務所で確認して教えてあげました。区役所の最初の窓口だと思ってましたよ。今でも会うとみんな挨拶してくれて、親切をモットーに長くやってきた甲斐があったと思う。

収納率100%にするには、あたしたちがやらなければと思って一生懸命だったね。都の基準の収納率を上回った分は区の財源になったから、穂高荘や塩沢荘が造れたんですって。「あなたたちの頑張り」で建てられたんですよ」って表彰もされた。誇りだわね。それをずーと65歳までやってきて楽しかったのよ。面白かった。

終い子だから甘えて家の中で育ったあたしが、この仕事によって社会参加して、人のためにも自分のためにも働けて、人間的に成長できたかなと思いますね。世話好きで、あまりよくよしない、シャッキリしているところは親から貰ったものかもしれないね。いつでも兄貴たちが一緒に心配してくれたし、みんながよくしてくれましたから苦労って無かったな。

夫は優しくってね、あんまり怒らない人。60歳になったら毎月1回は旅行しようって、働いている時から積み立てを始めて、二人でよく出かけました。平成18年(2006年)に夫が亡くなる前に行った九州旅行が一番の思い出です。南田家のお米はあたしが千葉から取り寄せているの。ひ孫も今年就職してみんながお弁当を持っていくから大変でしょう。子や孫が「お米ありがとう」って取りに来るから顔が見られるしね。まあ満足な人生です。地元の敬老会(くすのきクラブ)に入って、これからも元気で楽しく人生を送っていきたいと思います。



◆インタビュー／2020年10月
2020年11月
◆聞き手／小野塚和江、村田正子
◆コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆
総務部総務課
人権啓発係
☎6638-8089